「変な顔」「おまえの食べ物ないよ」

母の背で聞いた暴言

1面から続く

桜島を望む高台の自立ホームで、上村慶子さん(76)＝鹿児島市＝は暮らしている。障害者が働く作業所なども併設され、そこで昨年夏から戦争体験を語り始めた。熱心な職員に勧められたからだった。

「変な顔」「おまえが食べる物はないよ」…。若い施設利用者たちを前に思い出すのは、戦時中、母の背中で聞いた暴言の数々だ。

手足と顔にまひのある娘をおぶって歩く母に、通りすがりの人が冷たい視線を浴びせた。わざわざ呼び止めて「荷物かと思ったら何だ。そんなのからって出掛けるな。みっともない」と言い放つ事案も。

父は軍人で、生後3カ月のころに戦地で命を落とした。男は戦場へ、女は銃後を支える。できなければ半人前。弱者にとことん厳しい空気が、子どもにまで押し付けられる時代だった。

それでも母は世間の目を気にしなかった。外に家いたござに座らせて遊ばせてくれたが、姉と兄は嫌がった。「私たちまで笑いものになる」「嫁をもらえなくなる」。親子げんかの原因はいつも自分だった。

「何でこんな体に生まれたのかって、泣いたこともありました」

飛び出したくても一人ではかなわない。ほとんどの時間を家の中で過ごした。字を覚え、本を読む。「障害者のくせに」と声が聞こえても、母はたくさんの書物を借りてきてくれた。

終戦は宮崎の疎開先で迎えた。戦争から遠ざかるにつれ、世間の空気が変わり始める。13歳のころには、本箱に3輪を付けた車いすを手作りしてもらった。それで教会に通い、友人ができた。思い通りに動き回る姿を見て、母は泣いた。

「母は『学校にも行かせられず、すまなかった』とよく言っていた。でも私はまたいい方だったんです。母が優しかったから」

二人三脚で生きてきた母にも徐々に老いが迫り、少しでも自立できればと、40代半ばから福祉施設に通い始めた。亡き母が病に倒れたのを機に今の施設に入り、17年がたつ。

今、1人部屋でヘルパーの手を借りながら自由に暮らす。おしゃれが趣味で、電動車いすで時々出掛ける鹿児島市のデパートで買ったという。

「警察も買い物も堂々とできる。今が一番楽しいですよ」

母の背中で聞いた暴言を耳にすることは、もうないだろう。平和な時代が続く限り。

（森井徹）

戦後70年

施設の職員と談笑する上村慶子さん（左）。「今が一番楽しい」という（撮影・古賀哲裕）